

ゲシュタルト療法におけるコンタクトの心理過程について

—内的作業モデルと人生の実存的意味の関連から—

田 中 勝 悟

1. 目的：ゲシュタルト療法の提唱者 Perls (1973) によれば、私たち個人と外界との接点をコンタクトといい、その接点において私たちは外界と関わっていくとしている。そのコンタクトの関わり方が適切であれば、個人の欲求は適切に満たされ、適切な人間関係を築くことができ、人生に実存的意味を感じることができる。しかし、その関わり方が不適切であれば、欲求は満たされず、適切な人間関係を築くことができず、人生に実存的意味を感じられない。そのような人を Perls (1973) は神経症と呼んだ。本論文は、この Perls (1973) のコンタクトおよび神経症の理論を統計的に実証することを目的としている。
2. 方法：被験者は近畿圏内の大学生、大学院生 293 名（男子 130 名、女子 163 名）。コンタクト理論については Kepner (1982) が作成した GCSQ (Gestalt Contact Style Questionnaire) を筆者が日本語に訳したものの、対人関係パターンについては戸田 (1988) の内的作業モデル尺度、実存的意味については Crumbaugh & Maholik (1964, 1968) が作成し、佐藤訳を基盤に倉戸 (1987) が修正を加えた PIL テストを用いた。
3. 結果：GCSQ の因子分析の結果、「コンタクト過剰」「感受性」「依存性」「独立・主体性」「投射・取り入れ」の 5 因子が抽出された。「コンタクト過剰」は他者の言葉に簡単に傷つき、ある出来事（コンタクト）にいつまでも固執してしまう傾向を表す。「感受性」は他者の言葉や気持ちに対する感受性の高さを表す。「依存性」は自身の問題を積極的にしようとはせず、他人任せにする傾向を表す。「独立・主体性」は自他の境界を分けて、自分というものを確立している傾向を表す。「投射・取り入れ」はゲシュタルト療法における神経症のメカニズム、「投射（自分の問題を外界のせいにしてしまう傾向）」「取り入れ（他者の価値観をまるごと鵜呑みにしてしまう傾向）」の特徴を示す項目を有する因子である。「コンタクト過剰」「依存性」「投射・取り入れ」の因子は Perls (1973) のいう神経症的傾向の特徴を有する因子であるといえる。また、「感受性」「独立・主体性」はコンタクトとの関わり方が適切に働いている状態であるといえる。
4. 考察：相関分析・重回帰分析の結果、「コンタクト過剰」「依存性」「投射・取り入れ」といった神経症的傾向にある人は、不安定な人間関係を築きやすく、人生に実存的意味を感じていないことが見いだされた。逆に、「感受性」「独立・主体性」では安定した人間関係を築き、また人生に実存的意味を感じているという結果になった。

よって、本研究の結果は Perls (1973) のコンタクトおよび神経症の理論を統計的に裏付けるものであるといえる。